



かもめ風だより

2016.4

VOL 4



メニュー紹介

扉の写真…「昭和56年1月 本物のストーン使用によるカーリング・リーグ戦」

この人・この作品…宇江佐 真理

『八丁堀喰い物草子 江戸前でもなし卵のふわふわ』

『夜鳴きめし屋』『ウェザ・リポート 見上げた空の色』

音の缶詰・CDレビュー…魅力的な女性ミュージシャン列伝 ビリー・ホリディ
「ビリー・ホリディ」「レディ・イン・サテン」

いちおしコミック…仲宗根みいこ『ホテル・ハイビスカス 1. 2. 3』

■扉の写真

昭和55年12月15日、常呂町に初めてのカーリングストーンが2セット（町とカーリング協会が各1セット購入）到着。この写真は、翌56年1月に行われた協会のリーグ戦。カーリングストーンのセットが少なく、ボンベを利用したストーンを併用しながらのリーグ戦ですが、本格的なカーリングの始まりです。昭和56年は、親子カーリング大会、町民カーリング大会、NHK杯など第1回づくしの年でもありました。（場所は、スポーツセンター裏側）

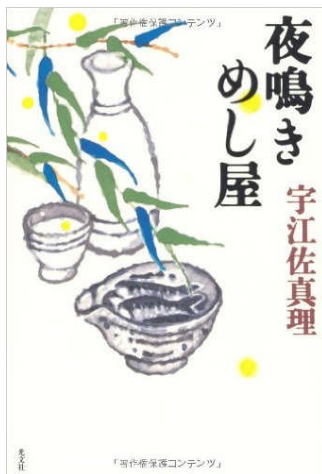


こ	の	人	
	こ	の	作 品

宇江佐 真理

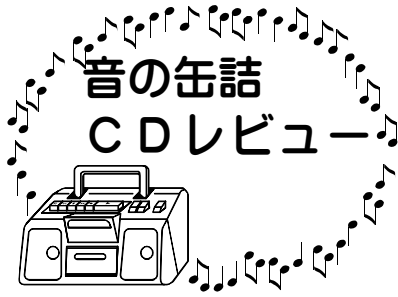
『八丁堀喰い物草紙・江戸前でもなし 卵のふわふわ』

『夜鳴きめし屋』『ウェザ・リポート 見上げた空の色』



●宇江佐真理さんは函館生まれで、函館で暮らしながら数々の時代小説を生み出しました。北見市内の各図書館には殆どの著作があります。●今回は、食べものや料理が味わいを深くしている作品を紹介します。●まずは、『八丁堀喰い物草紙・江戸前でもなし 卵のふわふわ』（講談社）。食べものをタイトルにした連作短編小説で、嫁に嫁いだ先の家族と夫婦のあり方を描いた物語。●主人公ののぶが嫁いだ相手は、八丁堀の隠密廻り同心／正一郎。夫婦になって6年になりますが、2度の流産を経て子宝に恵まれず、正一郎からは何かにつけ冷たくあしらわれる日々が続き、のぶは心を痛めます。●折れるのぶの心を支えているのは、義父の忠右衛門とその妻の心で。●短編のタイトルのいくつかは、忠右衛門が食した珍しい料理を書き留めた覚え帖から取り、物語の芯にもなっています。●つかみどころがなく、懐の深い忠右衛門とサバサバとした物言いの心で、のぶを嫁にする前にあった結婚の破談がトラウマになった正一郎との狭間で夫婦のあり方に悩むのぶの揺れ動く心が物語の肝です。中でも忠右衛門の存在は、のぶと正一郎の関係を修復し、物語を軟着陸させる重要な役割を果たしています。●連作の最後のタイトルは、「ちょろぎ」。おせちの黒豆の上に梅酢でほんのり染まった巻き貝の形をした地下茎です。黒豆はそのままでもおせちの一品ですが、ちょろぎがあることで黒豆をいっそう引き立てます。忠右衛門がちょろぎの役を演じること

と正一郎の気持ちが解け合う最後は、読み心地良い、余韻の残る作品になっています。●『夜鳴きめし屋』（光文社）も夫婦と家族の物語ですが、若い頃に苦い別れをした男女2人が新たに関係を築く連作集。●亡くなった父親の古道具屋「蓬萊堂」を継いだ長五郎が居酒屋へと商売替えし。午後8時頃から翌朝まで開ける店になり、いつしか食事が中心の夜鳴きめし屋へと変貌。タイトルの由来とここまでが物語の入口。28歳の長五郎は、店同様、世間の普通とは少し違う主になっています。●この作品は、鳳来堂の長五郎、長五郎と一緒になれず17歳で別れ、芸者になったみさ吉、みさ吉の息子／惣助が章を重ねるごとにぎくしゃくとした互いの思いや距離を縮めていくところに妙があります。この3人の関係を深める脇役が鳳来堂を訪れるさまざまな客たちです。とりわけ、みさ吉の先輩芸者／駒奴、江戸詰めの侍／浦田、夜鷹のおしのの存在感、言葉のやりとりは、人の心の揺れるあやうさと誠実さを求める人の本質を表しています。●10代で別れるしかなかった長五郎とみさ吉が10年を経て再会し、新たに関係を築いていくさまは、読み手を焦らせつつも温かな気持ちにします。●最後におまけを。著者のエッセイ集『ウェザ・リポート 見上げた空の色』（文藝春秋）の「にしん漬け」に、初めてにしん漬けに挑戦し、樽から出した時の文があるので抜粋して紹介を。「…重しをどかすと、おいしそうな匂いがする。〈うまい！〉味見をして思わず感嘆の声を上げた。その日の夕食には、もちろん私のにしん漬けを食卓にのせた。いつもはあれこれ難癖をつける夫も素直にうまいと応えた。やったね。大いに自信をつける。…小説の執筆の合間に来年も漬けようと、今から心積もりしている。北国の生活も捨てたものではない…」●残念ながら、宇江佐真理さんは昨年11月に病気のため66歳で亡くなりました。私たちは大事な作家を失いました。



▶▷常呂図書館のCD紹介

魅力的な女性ミュージシャン列伝

ビリー・ホリディ

「ビリー・ホリディ」「レディ・イン・サテン」



今回紹介するのは、ビリー・ホリディ（1915-1959）。サラ・ヴォーンやエラ・フィッツジェラルドと並び、女性ジャズ・ヴォーカリストご三家の1人と称されています。初レコーディングは、ベニー・グッドマン楽団と共演した1933年。カウント・ベイシー楽団やサクソ奏者レスター・ヤングとの共演でも知られています。

ビリー・ホリディのもっとも有名な曲は「奇妙な果実（ストレンジ・フルーツ）」です。アルバム「ビリー・ホリディ」に収められている曲ですが、発表は1939年。ある一篇の詩を読んだビリーが強く心を動かされ、生まれた曲です。ビリーの自伝『奇妙な果実』（晶文社）では、この曲を初めて歌ったときのことを「私は客がこの歌を嫌うのではないかと心配した。最初に歌ったとき、ああやっぱり歌ったのは間違いだった、心配していたとおりのことが起こったと思った。歌い終わっても、一つの拍手さえ起こらなかった。そのうち一人の人が気が狂ったような拍手を始めた。次に、全部の人が手を叩いた。…この歌は、私の最大のベストセラーになった」と書き、この曲を歌うたびに父親の死にざまが臉に浮かぶとも記しています。

ブルースという音楽が生まれて100年を記念して行われたコンサートを収めたCD「ライトニング・イン・ア・ボトル」の中で、ソウルシンガーのインディア・アリーが「奇妙な果実」を歌っていますが、その歌詞の最初は「南部の木には奇妙な果実が実る／葉には赤い血、根まで染み込む赤い血が／黒い体が南部の風に揺られている／奇妙な果実がポプラの木に吊されて」。人種差別が激しかった時代の南部であった黒人のリンチを歌ったものです。歌い手と時代によって「奇妙な果実」にど

のようなニュアンスの違いがあるのか聞き比べてみるのもいいかも…です。

ビリーの父親はテキサス州ダラスで肺炎にかかり亡くなりますが、黒人だったために病院をたらい回しされたことが死因でした。ビリーにとって、「人種差別」は父親に繋がる記憶であると同時に、リアルな日常でもありました。「奇妙な果実」は、ビリーにとって自身と愛する家族につながる大切な曲そのものでした。アルバム「ビリー・ホリディ」には、ビリーの代表的な曲が14曲収められています。

もう一枚の「レディ・イン・サテン」は、亡くなる1年前、1958年の作。自伝『奇妙な果実』の最後に付されている大和明「ビリー・ホリディの人と芸術」



では、このアルバムを「晩年のビリーの絶唱…持ち味を最大限に生かす…愛と孤独に関する内容を持った歌…ビリーの歌う愛の歌くらい人の心を打つものは

ない」「もう一つ重要な成功の要因として、ストリング・セクションの効果を最大限に発揮し…女性コーラスを参加させることによって、一層優美かつ叙情性豊かな音をつくりあげている」と評しています。ボーナス・トラックを含め16曲、声質・声量ともに落ちながらもおとなの音楽を聴くことができる1枚になっています。

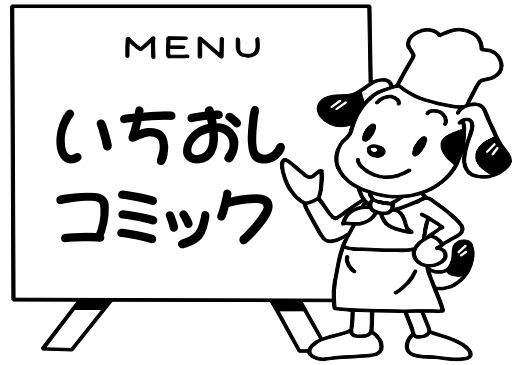
没後半世紀以上経ち、ビリー・ホリディの曲を聴く機会はないに等しい状況ですが、これを機にどんな歌い手だったのか聴いてみてははいかがでしょう？「ユニー・チューブ」にも多くの映像があります。

★沖縄の持つ明るさとおおらかさを

仲宗根みいこ

『ホテル・ハイビスカス 1. 2. 3』

(ボーダーインク)



●出版社は沖縄で、第1巻は1997年の発売、第4巻までありますが、常呂図書館は第3巻まで所蔵しています。●ホテル・ハイビスカスは家族経営の小さなホテルで、雰囲気は民宿そのもの。主人公は、この家族の末娘で小学校3年生のみえこ。元気いっぱいで行動的、いろ



いろなことに興味を持ち、沖縄独特の風習や文化に根づいた騒ぎを台風のように巻き起こし、家族の強い絆でハッピーエンドを迎える物語になっています。家族は6人。お母さんは働き者で夜はバー勤め、おばあさんは生のゴーヤーを食べる元気者、お姉さんのサチコは白人とのハーフの女子高生、お兄さんのケンジは黒人とのハーフでボクサー志望、お父さんは、ビリヤード場の主人で三線(さんしん)がじょうず。みえこと遊ぶことが大好きで、父親の違うサチコ、ケンジからも信頼の厚いおおらかさが魅力です。●この作品を読むと、暮らしに溶け込んでいる沖縄文化の深さに気づかされます。第1巻2話は「キジムナー」が題材。キジムナーはガジュマルの木に住み、イタズラ好きな沖縄独特の妖怪です。みえこは、同級生の友だち／ガッパイとミンタマーの2人を連れて、夏休みの自由研究としてキジムナー探しを始めます。近所の

おじやおばあからキジムナーの話聞き、おそろおそろキジムナーと暮らしているというおじを訪ね、キジムナーを見ることに成功！●「ホテル・ハイビスカス」は映画化され、このキジムナーの話も収めていますが、映画「ナビィの恋」で好演した沖縄民謡界の重鎮／登川誠仁が三線を弾きながらみえことキジムナーを迎える印象的な場面があります。土着のふしぎな存在が暮らしの中に生き続けている沖縄らしさを感じる瞬間です。●第1巻3話のタイトルは「沖縄のおばあ」。パワーあふれるおばあさんたちが夜中に集まって踊ったりする夜型の暮らし、97歳の長寿をみんなでお祝いするカジマヤーなど、高齢者を敬う文化を知ることができます。また、おばあたちの集まりには、移民として暮らしたブラジルやハワイ帰りの人たちもいて、沖縄は移民を送り出した地域であり、歴史があったことも分かります。●みえこの家族の絆の強さを描いた第3巻の「いつも心に太陽を」は、この作品のテーマそのもの。お母さんが基地で知り合ったお父さんと結婚したときに、サチコとケンジにはアメリカと日本のどちらかの国籍を選べるようにしました。もうすぐ成人を迎えるケンジの誕生日が近づき、アメリカにいるケンジの父親からはいつでもケンジを受け入れるとの手紙が届きます。お父さんとお母さんが結婚したとき、ケンジとサチコはまだ小学生。2人がなかなかお父さんを受け入れることができなかった頃、2人にとっては世界はすべて敵のようなものでした。お父さんは、ただただ2人を抱きしめ、「いつも心に太陽を」という映画のタイトル曲を2人に聴かせるのでした。2人が国籍を選択する時期になり、ケンジとサチコは胸の内を語り合いますが、2人にとってアメリカにいるパーパー(父親)に会いたいという思いはありつつも、サチコの「父ちゃんはおきなワの父ちゃん1人、血が繋がってないのがふしぎなくらい、うちの父ちゃんは父ちゃんなんだよね」の言葉にケンジもうなずきます。●『ホテル・ハイビスカス』には、じわりと心に染み込んでくる沖縄の物語がいっぱいです。どうぞお試しあれ。